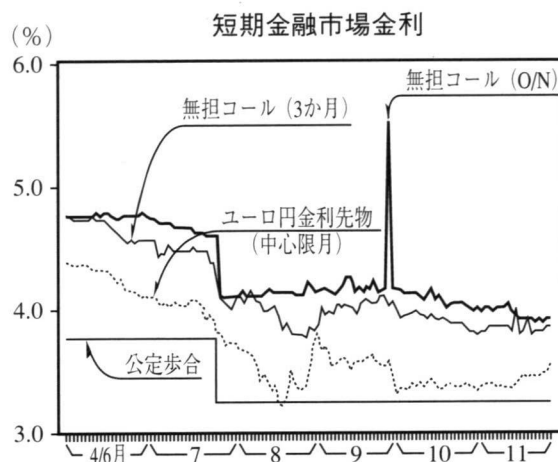


## 金 融 市 場 動 向 (平成4年11月)

### 1. 短期金融市場

11月中のオーバーナイト・レート（無担コール）は概ね弱含み横ばい圏内で推移した一方、ターム物レートは小動きの展開となった。この間、ユーロ円金利先物（金利ベース）は、月中を通じて上昇傾向をたどった。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は43兆5,045億円と前月（42兆7,209億円）を上回った。

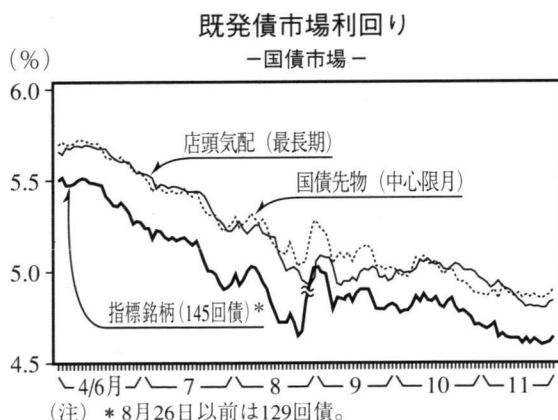


### 2. 資本市場

11月の国債利回り（145回債）は、米国長期金利の低下や軟調な株式市況を背景として徐々に低下、25日には4.605%と指標銘柄柄としては3年11か月ぶりの水準となった。その後月末にかけては、高値警戒感から若干上昇し、結局4.650%（前月末4.710%）で越月した（国債先物中心限月4.914%＜前月末4.885%＞、なお、10日に限月交代＜中心限月：12月限→3月限＞）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）は前月を下回った一方、先物は前月を上回った。

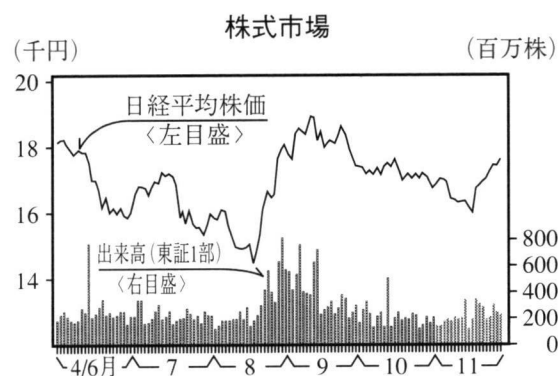
株式市況（日経平均株価）は、企業業績の悪化懸念や補正予算審議開始の遅れ等を背景に、月央にかけて低下、3か月ぶりに15,000円台をつける局面もみられたが、その後保険・年金資金とみられる買い等から反発し、結局17,683円（前月末比+916円）で越月した。この間、株式出来高（東証第1部月中1営業日平均）は、2.27億株と前月（2.19億株）を上回った。



なった（11月25日入札分：募入平均利回り4.763%、応募倍率3.97倍）。また、短期国債については、6か月もの、3か月ものともに全体として落ち着いた応札をみた（11月4日入札分＜6か月もの＞：募入平均利回り3.367%、応募倍率1.85倍、11月17日入札分＜3か月もの＞：募入平均利回り3.566%、応募倍率1.76倍）。このほか、超長期国債についても入札が行われ、クーポン・レートの引上げ（前回5.6%→今回5.7%）を好感し、順調な入札結果となった（11月5日入札分：募入平均利回り5.700%、応募倍率2.92倍）。

国内公募事業債の発行は、金利先安感から起債先送りの動きがみられたため、前月比半減した（10月3,150億円→11月1,550億円）。

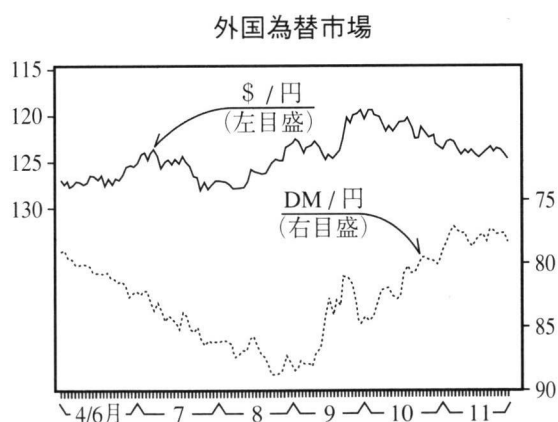
エクイティ市場での発行（11月払込み分、国内市場発行分）は、前月を若干上回ったものの、引続き低水準の発行にとどまった。



### 3. 外国為替市場

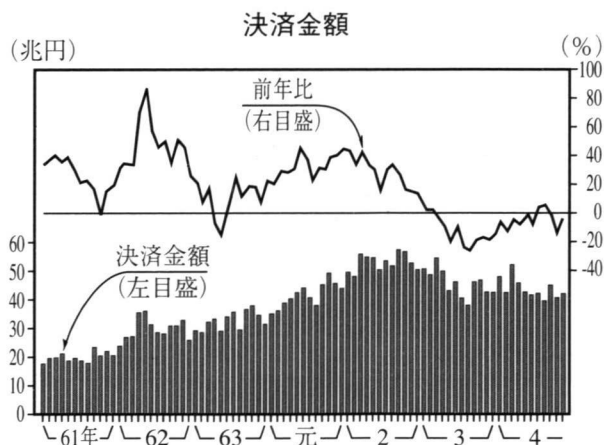
11月の円相場（対米ドル直物相場、終値）は、中旬以降、米国景気回復期待の高まりを背景としてドルが底堅く推移する中、目新しい材料もなく、124円を挟んでのもみ合い推移となり、結局124.75円で越月した（前月末123.35円）。また、円の対マルク相場（ニューヨーク市場、終値）は、10月からのDM急落の地合いを引継ぎ、月初は上昇したものの、その後は月中を通じて77～78円台の狭いレンジで推移し、結局78.41円で越月した（前月末80.03円）。

この間、外国為替市場出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は130.4億ドルと、前月（156.4億ドル）を下回った。



#### 4. 決 済

11月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、全銀システム取扱高、日本銀行当座預金受払額は前年を上回った（全銀システム：前年比+7.9%、日本銀行当座預金受払：同+9.3%）が、手形交換高（東京）、外為円決済交換高はそれぞれ前年を下回った（手形交換：前年比△4.9%、外為円決済：同△4.3%）。また、国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振込口座振替）は、移転登録、振込口座振替ともに前年に比べて増加した（移転登録：前年比+27.4%、振込口座振替：同+73.3%）。



(注) 1. 1営業日平均。  
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

#### 5. 資金需給、金融調節

11月の資金需給をみると、銀行券要因が5,179億円の不足（前年同438億円）となった一方、財政等要因は、源泉所得税を中心とする税揚げ等がみられたものの、第4回普通交付税を中心とする交付金の支払いが多額に上ったほか、社会保障、公共事業等の支払いも加わったため、全体では1兆3,007億円の余剰（前年同3兆2,060億円）となり、全体では7,828億円の余剰（前年同3兆1,622億円）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B売却等により資金を吸収した。

12月の資金需給（国債発行織込み前）については、銀行券要因が7兆円程度の不足（前年同7兆4,334億円）となる一方、財政等要因については法人税を中心とする租税の受入れ等が見込まれるものの、官庁ボーナスの支払いや国債の償還・利払いがみられることから1兆5,400億円程度の余剰（前年不足1兆2,193億円）となる見通し。この結果、全体では5兆4,600億円程度の資金不足（前年同8兆6,527億円）と予想される。

#### 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

10月のM<sub>2</sub>+C D平残前年比伸び率は△0.6%と前月比0.1%ポイント低下した。これは、財政要因（運用部の支払増等）がマネー押上げに働いたものの、投資信託等マネー対象外金融資産へのシフトがみられたことによるもの。通貨種類別にみると、預金通貨の伸び率が低下した一方、現金通貨、準通貨、C Dは総じて小動きにとどまった。

また、広義流動性の平残前年比伸び率は+2.8%と前月比0.2%ポイント上昇した。

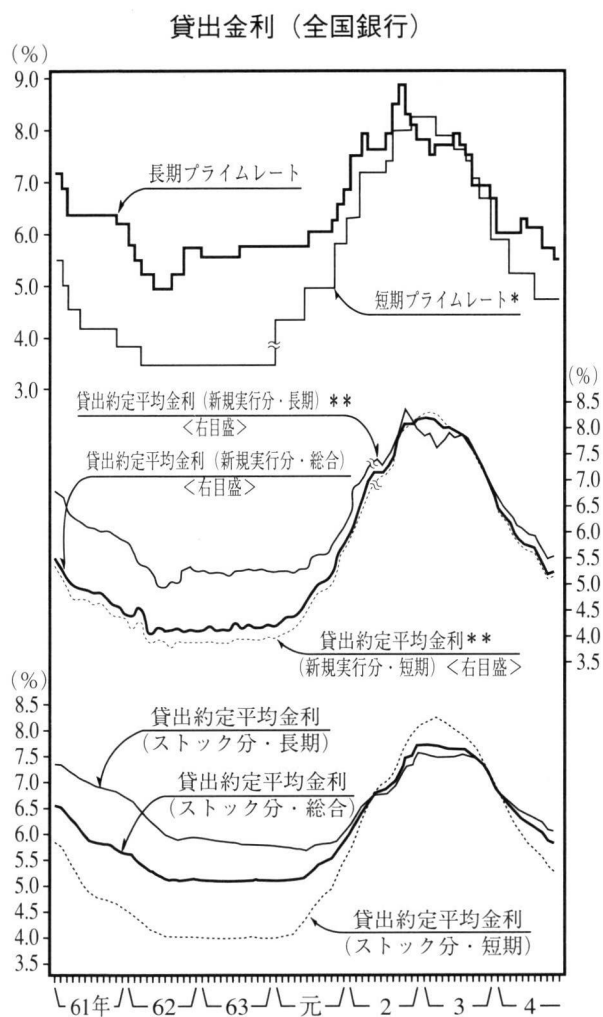
11月の銀行券平残前年比は+3.0%となった。

11月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀Ⅱ）は、前年比△1.4%と5か月連続の前年割れとなった。また、貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）は、前年比+2.0%と既往最低の伸び率を更新した。

## 7. 貸出・預金金利

10月中の貸出約定平均金利（新規実行分、全国銀行）をみると、短期金利、長期金利とも小幅ながら上昇した（短期+0.059%、長期+0.016%）ため、総合でも小幅上昇となった（9月5.196%→10月5.241%）。一方、貸出約定平均金利（ストック分、全国銀行）は、ストック分に比べ低利な新規貸出の実行による金利下押し効果等から、短期（△0.094%）、長期（△0.045%）、総合（9月5.854%→10月5.792%）のいずれも前月比低下した。

この間、10月の自由金利定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比低下した（9月3.506%→10月3.404%）。



（注）\* 元年1月以降は都市銀行の中で最も多くの数の銀行が採用した金利。

\*\* 2年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

（平成4年12月11日、調査統計局）